演題14. 顎関節症における関節鏡視下手術の臨床統計学的検討

○大平　明範，村田　尚子，佐藤　理恵
星　　秀樹，杉山　芳樹，関山　三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

顎関節症の非復位性円板前方転位例のうち，保存療法に著しく抵抗を示す症例に対し，関節鏡視下剥離授動術を行い臨床統計学的検討を行ったので報告した。対象は1996年3月から1999年10月までに本法を行った31例（42関節）とした。対象症例の性別は男性6例（8関節），女性25例（34関節）で，平均年齢は男性が30.2±11.7歳，女性が35.7±13.5歳であった。

手術方法は，全身麻酔下にて，Stryker 社製 TMJ Miniscope system（鏡体外径2.3㎜，視角0°，ロッドレンズ鏡）を用い，単一穿刺および複数穿刺で行った。効果判定は対象症例を Wilkes 分類の各 stage 別に分類し，当科の効果判定基準に従い評価を行った。結果は，stage 別分類では，stageⅢが6関節，stageⅣが33関節，stage Ⅴが3関節であった。stage 別の奏功率は，stage Ⅲが100%，stage Ⅳが86.7%，stage Ⅴが100%で，各 stage に著明な差はなかった。開口域については，術前の平均が27.7㎜であったものが，1か月後には，40㎜と有意に増大し，その後も経時的に増大を得た。関節痛や日常生活支障度については，術後1か月の時点で有意に改善を得，その後も経時的に改善を得た。合併症は末梢神経損傷によるものが7関節（16.7%），聴力低下が3関節（7.1%），咬合変化が2関節（4.8%）にみられたが，全ての症状は3か月以内に改善した。

演題15. 顎関節症患者におけるX線，関節腔造影X線，MRI画像所見と関節鏡視所見との対比および関節内癒着病変，滑膜炎と臨床症状との関連について

○大平　明範，村田　尚子，星　　秀樹
杉山　芳樹，関山　三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

術前の画像診断や臨床症状と鏡視所見について比較検討を行い若干の知見を得たので報告した。対象は，男性6例（8関節），女性25例（34関節）で，平均年齢は男性30.2±11.7歳，女性35.7歳±13.5歳であった。方法は，鏡視所見を Gold standard とし，癒着病変，関節隆起部の退行変性，円板穿孔，円板変形，後方滑膜の浮腫状の肥厚，増殖した滑膜組織について，顎関節造影画像や MR 画像と対比を行った。また，滑膜炎を4段階に分類し，関節痛との関連や癒着病変と開口域との関連性について検討した。癒着病変については，造影および MR 画像の Sensitivity はそれぞれ61.8%，29.4%，Specificity75.0%，87.5%，Accuracy64.3%，40.5%であった。退行変性については，MR 画像は Sensitivity75.0%，Specificity83.3%，Positive Predictive value64.3%，Negative Predictive value89.3%で，Accuracy80.9%であった。穿孔については，造影検査は Sensitivity100.0%，Specificity97.5%，Positive Predictive value66.7%，Negative Predictive value 100.0%，Accuracy99.7%であった。屈曲した円板変形については，造影および MR 画像の Accuracy は，それぞれ95.5%，92.8%であった。円板の凹凸不整については，診断不可能であった。滑膜組織の増殖については，造影検査 Sensitivity50.0%，Specificity100.0%，Positive Predictive value100.0%，Accuracy97.6%であった。後方滑膜の浮腫状の肥厚については，診断不可能であった。滑膜炎は後方滑膜に多くみられた。鏡視所見と臨床症状との関連性では，滑膜炎と疼痛，または癒着病変と開口域について，ともに相関関係があった。